

内モンゴル綏遠地域を巡る漢人・モンゴル人の争いと その流動的な多様性 —傳作義と徳王を中心に—

木下光弘

I. はじめに

清朝の崩壊に伴って、モンゴル統治の軍事システムは漢人の地方勢力によってそれぞれ支配され、それがまた軍閥形成につながって近隣の内モンゴル地域を支配していく。複数の軍閥勢力は、内モンゴル各地をそれぞれの勢力下に分割統治し、中華民国中央政府の弱体化を背景に、暴力によって内モンゴル地域を統治してきた⁽¹⁾。本稿では、そうした軍閥の中でも傳作義が支配した綏遠地域に着目したい。

綏遠では、軍事的体制を基盤とする馮玉祥や傳作義らが漢人「軍閥」として統治を行なった。これに対して、テムチュクドンロブ（徳王あるいはデ・ワン）らモンゴル人勢力による自立運動が起こる。モンゴル人たちの運動は、軍事力というパワーに対する反作用のように、これまでになく活発だった。ところが、そこに日本侵出やウランフ（烏蘭夫）を含む社会主義運動勢力の台頭が互いに絡み合い、情勢は複雑化していく。これにより、綏遠地域を安定的に支配する勢力は長い間、現れることがなかった。

本稿ではこうした複雑な綏遠地域の状況を少しでも整理しようとする試みである。中でも綏遠に関わる諸勢力が、軍事行動という形で各々の立場を比較的鮮明にさせた1936年11～12月の「綏遠事件（綏遠抗戦）」の前後を分析の対象とする。また、このような分析は、この地域において今現在に至るまで続く民族問題を理解するうえでも必要な視座となると考える。

綏遠省とは中華民国時代に存在していた省の名前で、現在、内モンゴル自治区の区都が置かれているフフホト（呼和浩特）市や鉄鋼やレアアースの産出地として知られているボグト（包頭）⁽²⁾市もこの綏遠省に含まれた。フフホトやボグトなどがあることからわかるように、綏遠地域は蒋介石の北伐完了後に省と名付けられたものの、伝統的には牧畜を生業としてきたモンゴル人が多く暮らす土地である。ところが、清代になるとフフホトに綏遠城が置かれ、そこには綏遠將軍が派遣され八旗軍も駐屯していた。地理的にも万里の長城以南の「漢人世界」と近く、また「モンゴル人世界」

の中では比較的温暖な気候であったため、内モンゴルの中でも比較的早い時期から漢人による入植・開墾が進められた地域だ。そのため、綏遠という場所は「先住民族」であるモンゴル人と、中国のマジョリティであり新たな移住民として勢力を拡大し続けた漢人との間での摩擦が発生しやすい地域であった。

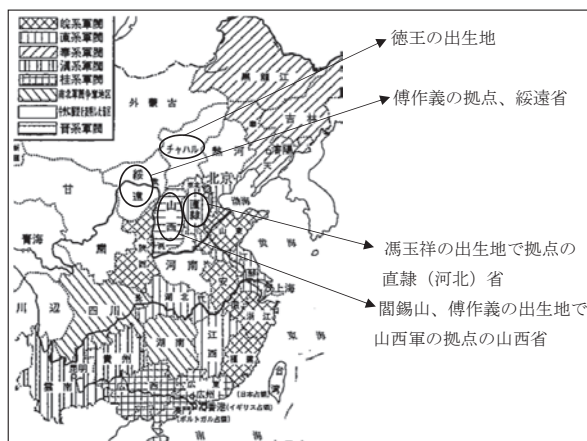
本稿で注目する時期に発生した「綏遠事件」も、モンゴル人と漢人との摩擦の現れだと見ることができる。この事件は、モンゴル人指導者徳王の軍が11月14日に当時綏遠省政府主席だった漢人「軍閥」傅作義の軍に攻撃を加えたことから始まっており、自立を求めるモンゴル軍と漢人「軍閥」軍の戦いであった。この戦いの当事者である徳王は綏遠における戦いを以下のように認識している。

蒙古と綏遠省との間にはずっと矛盾が存在していた。矛盾が生じた主要な原因は、私の浅薄な見解によれば二つある。第一は、制度上、蒙旗と省・県の二重権力が併存していることにあり、当然権力や税収をめぐる各種の衝突がひき起こされた。第二は、思想上、綏遠省当局には大漢民族主義があり、私には地方民族主義があって、思想の違いから、当然激烈な闘争がひき起こされた。⁽³⁾

彼が認識する制度上の「蒙旗」「省・県」の違い、「地方民族主義」「大漢民族主義」の闘争は、前者がモンゴル人の、後者が漢人の制度、思想と言い換えることができ、徳王は二つの民族の「摩擦」だと捉えていたことがわかる。

こうした「マイノリティ＝モンゴル人」と「マジョリティ＝漢人」という対立構造は大変わかりやすいためか、同じような見方が中国だけでなく様々な地域の民族問題を理解する際にもよく見受けられる。確かに、綏遠を含む内モンゴルの民族問題には「マイノリティ」と「マジョリティ」という構造⁽⁴⁾が歴史的に存在してきたのは紛れもない事実だ。しかし、すでに冒頭で指摘した通り、当時の綏遠情勢はさらなる複雑性を孕んでいるのだ。よって、「綏遠事件」の当事者の一人である徳王の見解は、残念ながら「浅薄な」理解だと言わざるを得ない。繰り返しとなるが、本稿ではそうした複雑な状況の整理を試みるものである。

ただし、本稿は史資料の整理や分析が未だ不十分な点も多く、「初歩的な考察」であることをあらかじめ断っておく。



地図①：綏遠省の位置と軍閥割拠形成略図（人民教育出版社編著
（小島晋治ら訳）
『中国の歴史』明石書店 2004 年 504 頁を基に作成）

Ⅱ. 綏遠における各勢力

1. 漢人軍閥：馮玉祥と閻錫山

1920年代綏遠地域は、当初漢人「軍閥」でクリスチャン・ジェネラルとも呼ばれた馮玉祥と山西軍を指導していた閻錫山えんしやくざんとの間で争い合っていた。そのため、必ずしも支配権が安定していたわけではなかった。

河北（直隸）省生まれの馮玉祥は当初直隸軍閥⁽⁵⁾に所属していたが、1924年に「国民軍」を名乗り、北京・熱河省・チャハル（察哈爾）省・綏遠省・甘肅省を基盤とする「西北軍閥（西北軍）」を形成する⁽⁶⁾。しかし、張作霖や呉佩孚ごはいふら北方の各軍閥はこれを快く思わず、彼らと敵対することになるが、1926年に中国国民党に入党、さらに1928年から再開された中国国民党の蒋介石が進める北伐に協力し、「中国北方」地域における一大勢力の維持に成功した。

一方の山西省に生まれた閻錫山は、1912年に袁世凱から山西都督に任命され、山西省の軍政を握るようになる。閻錫山は「山西モンロー主義（保境安民）」でも知られるように、山西省の内政とその支配に専念していた⁽⁷⁾。しかし、1924年に馮玉祥の勢力の増大に対して当初は中立を保っていた閻錫山であったが、馮玉祥の国民軍が張作霖・呉佩孚らに敗北すると、閻錫山は綏遠省に軍を進め掌握し、自軍を「晋綏軍」と名乗るようになる⁽⁸⁾。さらに、1927年に中国国民党に従うことを正式に表明した閻錫山は、翌年からの北伐においては馮玉祥とともに蒋介石に従った。こうしたこともあって、綏遠省は閻錫山の影響下として保たれた。

ところが、北伐完了後に軍閥の影響力を弱めようとする蒋介石に対して反発を覚えた馮玉祥と閻錫山らは1930年に反旗を翻した。いわゆる「中原大戦」⁽⁹⁾である。ただしこの戦いでは奉天派「軍閥」の張学良が蒋介石を支持したことや馮玉祥、閻錫山の間の齟齬から、反蒋介石勢力は敗北してしまふ。この「中原大戦」を契機に、閻錫山の山西軍の一人だった傅作義が綏遠省を勢力圏とする新たな「軍閥」として登場することになった。

なお、綏遠地域は閻錫山が中国国民党に従うようになっていた1928年に国民党中央政治会議第153回会議によって綏遠特別区域から綏遠省と改められている。そして初代と第二代の省政府主席は、共に閻錫山の配下の軍人である徐永昌(1928～29年)と李培基(1929～31年)が任命されている。省になるまでの綏遠特別区域には綏遠都統が置かれており、1925～26年は馮玉祥に従っていた李鳴鐘、劉郁芬が、26～27年は閻錫山の山西軍の一人の商震が、27～28年になると張学良の奉天軍閥に属する汲金純が、28年の半ばからは李培基が都統を務めた。このように、1920年代の半ば以降の綏遠地域の行政長官の多くが馮玉祥もしくは閻錫山の配下の軍人であり、この二人が綏遠における勢力を競い合っていたことがわかる。もちろん、汲金純のような奉天派軍閥の影響力や、後述する徳王を中心とするモンゴル人たちの活発な動きも無視することはできない。ただし、この地域を巡る漢人軍閥同士の相克については、馮玉祥と閻錫山が基軸だったとは言えるであろう。

年代	行政単位名	都督もしくは省政府主席	漢人「軍閥」
1925～26年	綏遠特別区域	李鳴鐘	馮玉祥
1926年		劉郁芬	馮玉祥
1926～27年		商震	閻錫山
1927～28年		汲金純	張作霖
1928年		李培基	閻錫山
1928～29年	綏遠省	徐永昌	閻錫山
1929～31年		李培基	閻錫山
1931～46年		傅作義	傅作義
1946～49年		董其武	傅作義

表：綏遠地域における漢人の行政の長、勢力下とする漢人軍閥の変遷

2：綏遠軍閥となる傅作義

1930年に「中原大戦」が始まった当初、傅作義は反蒋介石の立場で戦いに参加するものの、閻錫山の敗北後は張学良のもとに転じた⁽¹⁰⁾。これによって中国国民党側の将軍となった傅作義は、翌1932年には新たな綏

遠省政府主席に任命され、1946年までその座にあり続けた。上記の「表」からもわかるように綏遠都統並びに綏遠省政府主席の座は、常に一、二年程度で交替してきたが、傅作義は十五年近くもその座にあった「長期政権」だった。つまり、他の軍人たちと違い綏遠に根を下ろした最初の「綏遠軍閥」だったと言える。

1895年の光緒年間に山西省に生まれた傅作義は、1918年に閩錫山の山西軍（晋軍）に加わり、そこで軍歴を積み上げていった。1926年に閩錫山が中国国民党と手を組むと、彼は張作霖率いる奉天軍閥との間で涿州⁽¹¹⁾を巡る攻防戦を繰り返して、その名が広く知られるようになった。1930年の中原大戦の際に閩錫山と袂を分かち、その後は中国国民党政権側の將軍として活躍する。1931年には綏遠省政府主席に任命されてから⁽¹²⁾は、この地域を基盤とする「軍閥」勢力を形成していくこととなる⁽¹³⁾。

彼に関する研究は、必ずしも盛んであるとは言えないが、中国では「抗日英雄」であると同時に、中国共産党との「協調」について論じられることが多い⁽¹⁴⁾。日本では、光田剛が「国民党内の潜在的な反蔣派」の一人として傅作義に触れている⁽¹⁵⁾。もっとも、光田の論稿は傅作義をテーマにしたものではないが、傅作義の「潜在的な反蔣派」的側面を中国共産党と傅作義の間に通底するものと捉えると、中国で「定説化」している二者の連携は首肯できる。この他には、傅作義率いる中国国民党軍と閩東軍に接近したモンゴル人王侯、徳王とが1936年11～12月に衝突した「綏遠事件」に関するいくつかの論稿の中で傅作義が紹介されている⁽¹⁶⁾。たとえば、秦郁彦の論稿では自立した「軍閥」として捉え「蒋介石の指揮する中国中央軍が北上して綏遠軍を支援する態勢」を取っていたことに着目し、綏遠事件は日中戦争以前に存在した日中の武力衝突の危機だったと述べている⁽¹⁷⁾。こうした蒋介石とのつながりは、近年注目を集めた『蒋介石日記』の分析に基づき、作戦指導面での蒋介石の指導性を積極的に評価する楊天石の研究にも共通する⁽¹⁸⁾。一方、宝鉄梅は毛沢東が傅作義に送った手紙の存在を指摘しつつ、「傅作義主席率いる綏遠軍の勝利が全国の人々を熱狂させ、彼が抗日気運を高めた存在と述べている⁽¹⁹⁾。

これらの先行研究の中でも楊天石の研究は、従来「綏遠事件」において傅作義と国民政府、蒋介石との関係はないと言われていたことに対する反論として大きな意味がある。また、傅作義が公には中国国民党の將軍であった点から考えても、蒋介石と傅作義との協調は十分にあり得る。楊天石によると、「綏遠事件の際に徳王軍が占領した）百靈廟の奪還の主力部隊は傅作義が率いる晋綏軍だった⁽²⁰⁾」としつつも、「蒋介石が百靈廟奪還を決

定し、主動的に進撃した」⁽²¹⁾「(蔣介石が率いる)中央軍の働きを軽視することは出来ない」⁽²²⁾と論じている。閻錫山を通じてではあるが、「綏遠事件」における軍事行動に関する蔣介石からの具体的な指示も出されている⁽²³⁾。さらにバト・ハールガ・イン・スム(百靈廟)奪還後は、蔣介石の配下の陳誠ちんせいが傅作義の拠点である帰綏(現在のフフホト)に赴いて、「綏遠事件」後のことを協議している事実を明らかにしている⁽²⁴⁾。こうして、1936年の「綏遠事件」前後における傅作義と蔣介石の接点が立証された。

ただし、これによって従来から言われている傅作義と中国共産党、毛沢東との関係が完全に否定されたとも言えない。1935年8月1日に「抗日救国の為に全同胞に告げる書(為抗日救国告全体同胞書)」、いわゆる「八一宣言」が出された。この宣言は周知の通り、抗日のもとに中国国民党を含めたすべての中国人の団結を呼びかけるもので、当時「危機的状況にあった中国共産党の起死回生の新戦略」⁽²⁵⁾でもあった。そのため、中国国民党はもちろんのこと、「綏遠事件」とほぼ同時期に発生した「蔣介石監禁事件(西安事件)」の首謀者である張学良や楊虎城かいらい、あるいは馮玉祥や閻錫山などをはじめとする多くの勢力に「抗日」への協力要請や激励の書簡が多数、毛沢東や周恩来、彭德懐らの名前で送られている⁽²⁶⁾。こうした中国共産党の生き残り戦略の一環の中に、中国共産党から傅作義への接触も十分にあり得ることだ。

ちなみに、毛沢東が傅作義に出したとされる書簡には、傅作義に抗う徳王、李守信、チョトパジャップ(卓特巴扎普)らを傀儡かいらいであると批判したうえ、傅作義を愛国者だと評している。そして、綏遠、西北、華北防衛の責は傅作義だけでなく、全国の人民や紅軍(中国共産党軍)にもあると述べ、共に「抗日連合軍や国防政府」を組織しようと呼びかけている⁽²⁷⁾。つまり、中国共産党側から傅作義への連携を求める内容になっているのだ。

上述のように、綏遠軍閥の傅作義は「綏遠事件」時点において中国国民党、中国共産党双方の接点があった訳だが、傅作義自身はどちらにシンパシーを覚えていたのであろうか。管見のところ、当時の傅作義自身の心情が現れている史料を見いだせてはいない。ただし、「綏遠事変」の翌年にあたる1937年に傅作義自身の名で「綏遠経過詳記」という文章が『軍事雑誌』に掲載されている。この文章は『内蒙古文史資料第二十五輯、綏遠抗戦』(中国人民政治協商会議内蒙古自治区委員会文史資料研究委員会編、内蒙古文史書店1986年)にも再録されている。ここで傅作義は、「綏遠事件」の展開を詳細に記述している一方で、なぜか中国国民党、中国共産党のどちらの関与についても触れられていない。

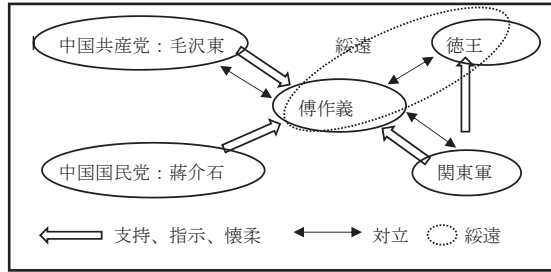
今日明らかになっている通り、双方からは積極的な接触があったのであれば、傅作義の「綏遠事件」の回顧録に不自然さを感じる。以下は、推測の域を出ないが、「綏遠事件」の時点では傅作義は中国国民党、中国共産党のどちらかを選ぶことを避けたのではないだろうか。なぜならば、1945年の日本の敗戦後、国共内戦という形で中国国民党、中国共産党のどちらかの立場を表明しなくてはならない状況に陥った時、立場を転々とさせたというその後の彼の態度があるからだ。もともと国共内戦には反対の立場だったとされる傅作義は、当初は中国国民党の将軍として人民解放軍と何度も矛を交えるが、最終的には中国共産党のもとに下り、1949年の北京の無血開城に至っている。「戦争」という命がけの場面で、いかにすれば生き残り、勢力を保つことが出来るのかを考えると傅作義のように容易に立場を表明しないことが当然のことなのかもしれない。

なお、傅作義への触手は中国共産党だけではなく、日本側からも行なわれていた。たとえば、1935年の新聞報道によると傅作義自身が「北支那における日支兩國經濟提携」の必要性を主張し⁽²⁸⁾、さらには「華北聯省自治政府」にも参加していた⁽²⁹⁾とある。こうした日本側による提携の模索の背景には、傅作義が共産党勢力に対する警戒感を持っていると見られていたからである。たとえば、「綏遠事件」発生の前年に記された『北支に躍る人々』(小林知治、政道社1935年)には、傅作義が中国共産党軍の北進に不満を持っており、「防共自治」に好意的だと述べられている⁽³⁰⁾。それどころか、傅作義自身が「共産黨防衛には大いに日本と提携してやらねばならぬと、絶えず聲を大にして叫んでゐた。」⁽³¹⁾とまで書かれている。そのため、1936年の始めにまとめられた関東軍の計画の中に「綏遠省の傅作義にたいしては関東軍と防共工作を結び協力するように工作」する⁽³²⁾ともあるのだ。確かに、綏遠は地理的にソ連にも近く、傅作義が自身の勢力圏の「共産主義化」を恐れていた可能性は十分に考えられる。傅作義によるとされる言葉の信ぴょう性については、今後さらなる検討が必要であろうが、いずれにしても、これらのことから日本側は継続的に傅作義と接触していたことは間違いない。場合によっては、たとえ一時的だったかもしれないが、日本による懐柔工作に前向きだったとも考えられる。

上述のような事情を勘案すると、傅作義という人物は、論じる側の立場によって捉えられ方が異なり、「中国国民党派」「中国共産党派」「抗日派」「親日派」と断定することが難しいことがわかる。



写真①：傅作義
 (『我的父親傅作義將軍』より
 綏遠省政府主席在任中の
 1933年9月撮影)



図①：「綏遠事件」前後の傅作義の関係図

3：モンゴル人の「高度自治」を求める徳王

漢人軍閥による「暴力」による支配に対し、モンゴル人たちは自立運動を強めていく。その中でも、テムチュクドンロブ（以下では徳王）の活動がよく知られている。

「綏遠事件」におけるもう一方の当事者である徳王も傅作義と同様に多様な側面を有している。この時期における彼に関する具体的な史資料分析は別稿に譲ることにするが、徳王に関する研究蓄積は比較的多い。周知の通り、当初の徳王は中国国民党政権の枠内で高度な自治を目指しており、蔣介石に対して「モンゴル工作」の交渉を何度も続けてきた。しかしながら、彼の希望の実現性が低いと判断した後に、日本の関東軍と接近していった。そのため一般的な、中国国内における徳王の評価は、中国の統一を脅かした「日本の傀儡」として論じられることが多い⁽³³⁾。一方で、『徳王自伝』（岩波書店1994年）の翻訳者でもあり、徳王研究の第一人者ともいえる森久男は、徳王を「親日」でもなければ、「親国民党」でもない論じ、「国民党・日本軍と結託したことは事実かもしれないが、それはすべて内蒙高度自治あるいは蒙古独立のためであり、「民族」をつねに最高位に置いていた」⁽³⁴⁾のだという。要するに、徳王も中国国民党と関東軍といった異なる勢力に対して、相反する対応をしており、その背景には彼の「モンゴル民族主義者」というさらに別の側面があるという。

徳王は、傅作義と同じく光緒年間の1902年の生まれで、内モンゴルのシリングル（錫林郭勒）盟西スニト（蘇尼特）旗⁽³⁵⁾出身である。シリングル盟は、綏遠と同じく蔣介石の北伐完了後、そのほとんどがチャハル省の一部とされた。徳王が生まれた西スニト旗は、シリングル盟の中でも西

に位置し、傅作義が拠点とした綏遠省に隣接している。

1908年、徳王は父の死に伴って西スニト旗ジャサグ（旗長）の地位を継承する。1911年の辛亥革命では外モンゴルにおいてボグド・ハーンによる「モンゴルの独立」の動き⁽³⁶⁾に対しては積極的に支持しなかったようで、それを理由に袁世凱政府によって翌1912年に爵位が引き上げられている。そして、1924年に、シリングル盟の副盟長に就任する⁽³⁷⁾。1928年、南京国民政府の蒋介石が北伐を完了させて「中国を統一」すると、これまでのモンゴル人地域に省制度が敷かれることになった。ところがこの省制度に対し、多くの内モンゴルの王侯は「みずからの政治的特権と蒙古自治が深刻な危機に曝されている」⁽³⁸⁾と認識するようになる。こうした背景の中で、徳王も内モンゴルにおける「高度自治」を求めるようになっていたと思われる。「開墾による牧畜経済への圧迫に対する蒙古人民大衆の反対、省・県を設けて盟旗の権利を侵害することへの蒙古王公の不安および日本の侵略など」が内モンゴル自治運動の発生原因だと、後に回顧している⁽³⁹⁾。

当初、徳王は各盟旗代表とともに南京にて「モンゴル政策」の転換を求めていた。しかし、思うような成果をあげることができず、内モンゴルに戻った徳王は、1933年にウランチャブ（烏蘭察布）盟のバト・ハールガ・イン・スム（以下では百霊廟）にて各盟旗の王侯を招集し、国民政府に対してチャハル・綏遠省の廃止、内モンゴルの高度自治、および統一の内モンゴル自治政府設立などの要求することについての話し合いを行なった⁽⁴⁰⁾。これがいわゆる「百霊廟会議」である。そして、この会議の開催地が前節までで詳述してきた傅作義が勢力圏とする綏遠省内であった。徳王たちの要求に対して、南京の国民政府は必ずしも肯定的ではなかったが、折衝を重ねた結果、1934年に百霊廟蒙政会（蒙古地方自治政務委員会）の成立が認められるに至る。ここで確認しておきたいことは、この時点での徳王たちの要求は、中国国民党政権の枠内における「高度自治」だったことだ。そのため、蒙政会成立式典ではチンギス・ハーンの肖像画だけでなく、孫文の肖像画と中国国民党、国民政府の旗も掲げられていた。さらに、綏遠省政府主席の傅作義も部下を派遣し、祝意を表している⁽⁴¹⁾。

ところが、蒋介石は徳王たちの「高度自治」の要求を「地方自治」という形でしか認めないばかりか⁽⁴²⁾、徳王の側近であったフフバートル（韓鳳林）^{ほんほうりん}を1934年に北平（現在の北京）の憲兵第三団に逮捕・殺害させるという「韓鳳林事件」まで発生させてしまう。これらの結果、徳王は蒋介石に頼って自分の勢力を拡大することは出来ないようになる⁽⁴³⁾。

ちなみに、百霊廟とはウランチャブ盟西部に位置する都市の名前で、ダ

ルハンミンガン（達爾罕茂明安）連合旗の旗政府所在地である。山西省から外モンゴルへ至る交通の要路上にあるだけでなく、シリングル盟やイケジョー盟（伊克昭盟、現オールドス（鄂爾多斯）市）からも近く、会議などを招集するには好適地である。また、その名からもわかるようにチベット仏教の大刹百靈廟がある。さらに当時は無線基地も置かれており、常に国民政府等とも通信交換できる場所でもあった⁽⁴⁴⁾。

一方で、「百靈廟会議」にはチベット仏教僧を装っていた笹目恒雄も参加しており⁽⁴⁵⁾、日本の触手の存在も確認できる。日本人で徳王に最初に接触を持ったのは笹目と盛島角房である⁽⁴⁶⁾。関東軍は特に盛島を重要視しており、1929年冬から徳王に対する直接懐柔工作をはじめている⁽⁴⁷⁾。蒙政会成立後も徳王を抱き込むためにたびたび日本人が派遣され、徳王も彼らとの会談に応じている⁽⁴⁸⁾。当初、徳王による関東軍との接触は、蒋介石政府に対する脅し的手段に過ぎなかったが⁽⁴⁹⁾、「韓鳳林事件」と土肥原賢二奉天特務機関長の来訪を契機に接触を深めていく⁽⁵⁰⁾。ところが、蒋介石側は有効な対策を講じることが出来ず、「盟・旗制度の維持」を求める蒙政会と「省・県制度による支配」を進める傅作義の綏遠省政府の間の軋轢はさらなる深まりをみせていった。こうした軋轢が、徳王と関東軍の接近を促進させ、1935年10月の蒙政会第三回委員総会で「蒙政会は、中国政府との関係を離脱して、日本に依拠し、蒙古自治を達成する」という決議がなされた⁽⁵¹⁾。そして、関東軍は1936年になると「傅作義に対し各種の手段を講じて合作に努力中なり然れども一面に於いて若し傅作義にして合作を肯ぜざるときは武力を以て之を省外に追逐する決意の下に着々準備中なり」⁽⁵²⁾と認識するようになる。その結果、関東軍の支援を受けた徳王は以下の軍勢が傅作義の軍を襲撃した。それにより「綏遠事件」が勃発するのである。

上述のように、漢人軍閥の傅作義だけでなくそれに抗い「モンゴル人自治運動」を展開した徳王自身の立場も多様性を有している。さらに言えば、彼の勢力内部も「多様」なものであった。

たとえば、もともと南京国民政府の高官だったウネンバヤン（呉鶴齡）や彼の友人でもあったニマオトソル（尼冠洲）らは蒙政会の対日接近政策に批判的だった⁽⁵³⁾。ニマオトソルは記者会見の席で、「中央に従うよう蒙旗を宣撫する」と発言し⁽⁵⁴⁾、公然と南京国民政府を支持していた。他にも、モンゴル民族としての自覚を持ちながらも、左翼的な者、国民政府の三民主義を支持する者など様々な考えを持ったモンゴル人青年が百靈廟には集まっていた⁽⁵⁵⁾。

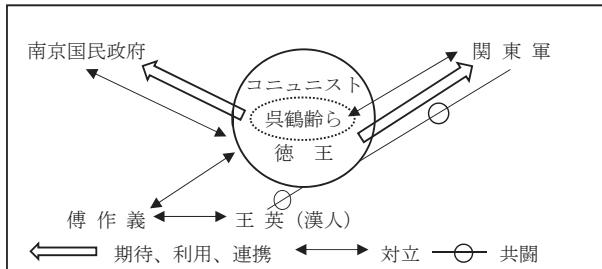
また、傅作義軍を最初に攻撃した部隊には、モンゴル人の李守信軍だけでなく漢人の王英が率いる軍であった⁽⁵⁶⁾。王英なる人物は、内モンゴルのバインノール（巴彥淖爾、1936年当時は綏遠省の一部）市の五原県出身の漢人で、河套（モンゴル名はオールドス（鄂爾多ス））の支配者への野望を持っていたようだ。それどころか、徳王は王英が綏遠を手に入れることを避けるために、やむを得ず「綏遠侵攻計画」の賛成にまわったという指摘まで存在している⁽⁵⁷⁾。従って、徳王たちとともに傅作義軍と戦ったといえども、王英の行動は「モンゴル人自治運動」とは関係がない。つまり、「反傅作義」勢力は決して徳王のもとで一枚岩だったわけではないのだ。「高度自治」を求めるモンゴル人、傅作義に不満を持つ漢人、関東軍など、「種々多様」であった点を強調しておきたい⁽⁵⁸⁾。



地図②：江口圭一編『資料日中戦争期阿片政策』岩波書店 1985年をもとに一部改めた



写真②：徳王
(ドムチョクドンロブ
『徳王自伝』岩波書店
1994年より)



図②：「綏遠事件」前後の徳王の関係図

Ⅲ. 結びにかえて：モンゴル人共産主義者ウランフに着目する意味

本稿では主に綏遠地域における漢人軍閥とモンゴル人による自治運動の内部における多様性について論じてきた。傅作義と徳王の関係を、今日の内モンゴルにおける民族問題の理解と同様に、漢人とモンゴル人という「安易な二項対立」のみで捉えられることがある。確かに、この両者にとって民族的相違に基づく対立は重要な争点ではあり、この点を否定するつもりは毛頭ない。ただし、その両者の立場や内部は決して一樣なものだと言い切ることはできないのだ。当時の時代情勢と共に彼らが選んだ生き残り方、勢力圏の拡張あるいは保持の仕方は流動的なものである。

なお、こうした複雑な傅作義、徳王の多様性をわかりやすくするために、「モデル図」を用いたが、しかし、こうしたモデル図は絶対視できるものではない。彼らについてより詳細に検討をすればするほど、さらなる両者の行動や勢力内の複雑さが現れるであろう。要するに、現段階で収集・分析できた史資料は限定的なものであるが、今後研究を進めていく中で、今回のようなモデル図が描けないほど複雑になることが予想される。

さて、当時の彼らよりも大きな権威や軍事力を持つ南京の国民政府や関東軍などどのように付き合い、利用し、対峙してきたのかを再整理することによって、傅作義、徳王双方の流動性をみてきた。しかし、綏遠を巡る争いを考える際、関東軍、国民政府、傅作義と徳王の他に考慮に入れておかねばならない勢力がある。それがコミュニストたちの動向である。特にモンゴル人コミュニストのことについては、ほとんど論じることが出来なかった。モンゴル人コミュニストの中心的人物としてウランフ（烏蘭夫）が知られている。彼は「綏遠事件」という傅作義と徳王との衝突が発生した1936年のはじめに「百霊廟暴動」と呼ばれる抗日闘争を指導した一人だとされている⁽⁵⁹⁾。

ウランフという人物は、中国共産党草創期からのメンバーの一人であると同時に、ソ連留学経験を持ち「国際コミュニスト」としての側面を持つ人物だ。さらにその後の内モンゴルは、彼の主導によって統一され、中華人民共和国の一部となる。こうした点から考えても、ウランフの動向は、モンゴル人による社会主義運動の中でも重要なファクターとなる。ただし、この時期、雲澤と名乗っていたウランフは、日中戦争が終わるまで内モンゴルの独立自治の運動にはノータッチだったとする指摘もあり⁽⁶⁰⁾、さらなる検証が必要だ。

だが、「民族的同胞」たちがモンゴル人民共和国という社会主義国家を樹立させていたことから、内モンゴルのモンゴル人たちの中に社会主義思

想が拡がりやすい環境だったとも考えられる。さらに、レーニンが提唱した「民族自決」という理念によって社会主義は、彼らのように独立国家を持たない被支配民族たちを魅了する力を持っていた時代でもあった。ウランフをはじめ、この時期の内モンゴルを理解するうえで当時のモンゴル人 коммуニストについての分析は不可欠なものであり、それによって当時のモンゴル人の「自治運動」がさらに複雑で多様なものだったといえるようになるだろう。

管見のところ、徳王勢力の中には、ウランフと同郷であった綏遠トゥメト旗出身のモンゴル人たちが多数参加しており、彼らの中には、社会主義思想に傾倒していた者が多かったことが同時代史料から確認できる⁽⁶¹⁾。徳王は、彼らを警戒して「モンゴル人の結束」を呼び掛けていたが、1936年2月、トゥメト旗の若者たちは徳王に反旗をひるがえしてしまう。つまり、モンゴルの自立を模索するうえで社会主義運動を用いるか否かという争点⁽⁶²⁾が、モンゴル人勢力の中に存在していたのだ。

こうしたモンゴル人 коммуニストの動向の中にも「多様性」は存在している。たとえば、ウランフのように中国共産党員に入党していたモンゴル人 коммуニストも少なくない。また、ウランフは「抗日」という立場から傅作義と連携していたという指摘もある⁽⁶²⁾。あるいは、徳王のもとに集まったモンゴル人 коммуニストの中に、朱実夫、白海峯のようにモスクワ東方大学留学経験者もおり⁽⁶³⁾、ソ連やコミンテルンの影響力も無視できない。さらに言うと、ウランフもモスクワ東方大学留学経験者であるだけでなく、近年の研究では「雲澤は自らの政治活動を国際共産主義運動のなかでの「モンゴル工作」と認識していた⁽⁶⁴⁾という指摘もある。したがって、ウランフをはじめとするモンゴル人 коммуニストたちも傅作義、徳王と同様に幾重にも多様な側面を持っているといえる。特に、徳王⁽⁶⁵⁾もウランフ⁽⁶⁶⁾もモンゴル民族主義者とする見方があるが、この時期のモンゴル人による活動を見直すことによって「民族主義」なるものも一様なものでないことを改めて認識することができるであろう。

本稿では、「綏遠事件」前後の漢人軍閥傅作義とモンゴル人指導者徳王らの複雑さをみてきた。しかし、モンゴル人による民族運動の多層的な構造について、十分な資料的裏付けが行なえなかった。今後は、さらなる史資料の調査をし、本稿で論じきれなかった点について掘り下げたい。そして、「二項対立的な歴史理解」「二項対立的な民族問題の理解」の克服を目指していきたいと考える。

- (1) 「軍閥と近現代内モンゴル」 科研合同ワークショップ2015年2月15日（於滋賀県立大学）、ボルジギン・ブレンサイン「開催趣意」文より。
- (2) 日本語文献では、カタカナで「パオトウ市」と表記されていることも多い。パオトウという音は「包頭」の漢語読みをカタカナにしたものだ。本稿ではモンゴル語で「鹿のいる場所」の意味を現す音をカタカナ表記した「ボグト」で記すことにした。
- (3) ドムチョクドノロブ（森久男訳）『徳王自伝 - モンゴル再興の夢と挫折』岩波書店1994年73-74頁。ドムチョクドノロブとは、徳王（テムチュクドノロブ）のことである。
- (4) 本稿で用いている「マイノリティ」「マジョリティ」という概念は、単に人数的な「少数派」「多数派」という意味だけでなく、「構造上、社会的に弱い立場の集団」「強い発言力を持ち優位な立場に立つ集団」という意味で用いている。
- (5) 直隸派ともいう。袁世凱の死後に北洋軍閥（北京政府）から分離したグループで、当初は馮國璋が率いていた。
- (6) 郭卿友主編『中華民国時期軍政職官誌（上）』甘肅人民出版社1990年403頁。
- (7) 佐々木到一『支那陸軍改造論』行地社出版部1927年115頁。徐理鴻「閩錫山」『民国高級将領列伝（1）』解放軍出版社1999年376-377頁。
- (8) 徐理鴻「閩錫山」『民国高級将領列伝（1）』解放軍出版社1999年377-378頁。
- (9) 「中原大戦」に関しては康越「中原大戦期における張学良政権と国民政府」『現代中国研究（14・15）』2004年9月39～60頁、西村成雄「1930年「中原大戦」と東北・華北地域政治の新展開」西村成雄・田中仁編『中華民国の制度変容と東アジア地域秩序』汲古書院2008年などの研究がある。ただし、前者は綏遠省やチャハル省といった内モンゴルに関する記述は見当たらない。
- (10) 張新吾『傳作義伝』團結出版社2005年33-35頁
- (11) 現在、中華人民共和国河北省中部に位置する都市。北京市にも隣接している。
- (12) 本稿では傳作義を綏遠省政府主席就任後は独立した「軍閥」としたが、省政府就任後も「閩錫山派の傳作義」とする文献も存在している（井上謙吉「現代支那の真相」大日本雄弁会講談社現代編集局、芦田均編『動搖の支那を中心として』大日本雄弁会講談社1937年98頁など）。こうした問題点は「軍閥」とは何かを定義したうえで、改めて論じるべきテーマである。ただし、本稿で論じる綏遠地域という枠組みの中では、当時の閩錫山の影響力は限定的なものだったと思われるうえに、本文中でも指摘した通り、傳作義は綏遠の他の行政長官と比べその在位年が圧倒的に長い。そのため、本稿では傳作義を独立した漢人「軍閥」として扱っている。
- (13) 傳作義についての説明は、滝口太郎「傳作義」天兒慧ら編『岩波現代中国事典』岩波書店1999年を主に参考にした。ただし、滝口の記述では傳作義の「閩錫山の山西軍に入隊」は1919年とされているが、管見の中国語文献ではほぼすべて1918年とされている。滝口がどのような資料を参照したのかの詳細はわからないが、本稿では傳作義の娘が記した傳冬『我的父親傳作義將軍』（京華出版社2008年、9頁）に「1918年に閩錫山の晋軍に配属されたと父親から聞いた」という記述に依拠し、1918年に山西軍に加わったと記述した。
- (14) 王克俊「回顧傳作義先生」中国人民政治協商会議内モンゴル自治区委員会文史資料研究委員会編『内蒙古文史資料第十四輯』内蒙古文史書店1984年31-32頁。薄一波『《傳作義生平》序言』中国政治協商会議全国委員会文史資料研究委員会編『傳作義生平』文史資料出版社1985年2頁。祝福「中国人民抗日の先声 - 綏遠抗戦及其影響」

- 中国人民政治協商會議全國委員會文史資料委員會有委員會編『傅作義將軍』中国文史出版社 1985 年 182 頁。高萩萍「傅作義」江紹貞主編『国民党起義將領』河南出版社 1987 年 70 頁。陽吉瑪「百靈廟戰役評述」『内蒙古社会科学』1987 年 3 月 62 頁。蔣曙晨『傅作義伝略』中国青年出版社 1990 年 34-38 頁。軍事科学院軍事歴史研究部『中国抗日戦争史（上）』解放军出版社 1991 年 389-392 頁など。
- (15) 光田剛「『逼蒋抗日』政策への転換過程」『立法法学』1998 年 7 月 307 頁。
- (16) 光田、前掲と同様に日本における先行研究の多くが傅作義をテーマにしたものではない。
- (17) 秦郁彦「綏遠事件」『国際政治（15）』1961 年 6 月 91-102 頁。
- (18) 楊天石「綏遠抗戦と蒋介石対日政策的転変」『找尋真实的蒋介石 - 蒋介石日記解説 - 還原 13 個歴史真相』九州書店 2014 年 3-20 頁。内田尚孝「川越茂・張群会談と綏遠事変」『ミニユニカーレ（4）』2014 年 3 月 2 頁。
- (19) 包鉄梅「綏遠事件と華北分離工作」『現代社会文化研究（27）』2003 年 7 月 205 頁。
- (20) 楊天石、前掲書、16 頁。
- (21) 楊天石、前掲書、12 頁。括弧内の補足は木下による。
- (22) 楊天石、前掲書、16 頁。括弧内の補足は木下による。
- (23) 楊天石、前掲書、9 頁。
- (24) 楊天石、前掲書、16-17 頁。ただし、1987 年に書かれた陽吉瑪論文でもすでに陳誠らの綏遠訪問の関する指摘があり、そこでは「表面的な慰問」だと評していて大きな意味を認めていない（陽吉瑪、前掲書、62 頁）。
- (25) 中央統一戦線部・中央檔案館編『中共中央抗日民族統一戦線文件選編（中）』1985 年 12-18 頁に「宣言文」が掲載されている。邦訳は土田哲夫訳「中国共産党抗日救亡のために全同胞に告げる書（八・一宣言）」歴史学研究会編『世界史史料（10）』岩波書店 2006 年 244-246 頁。括弧内の引用は土田による「八・一宣言」の解説より。なお、この八一宣言そのものは「モスクワの駐コミンテルン代表部が発したものであり、長征途上の毛沢東ら」はこの宣言を全く知らなかった（光田剛『中国国民政府期の華北政治』お茶の水書房 2007 年 297 頁）。
- (26) 「致閻錫山信（一九三六年五月二十五日）中共中央文献研究室編『毛沢東書信選集』人民出版社 1984 年 34-35 頁。「致楊虎城信（一九三六年八月十三日）」前掲書 38-39 頁。「致張學良（一九三六年十月五日）」前掲書 78-79 頁。「致馮玉祥（一九三六年十二月五日）」91-92 頁。「毛沢東、彭德懷致楊虎城信（一九三五年十二月五日）」中央檔案館編『中国共産党関于西安事変檔案史料選編』中国檔案出版社 1997 年 11-12 頁。「彭德懷、毛沢東関于周恩来為我方代表與張學良會談問題給王以哲電（一九三六年三月十八日）」前掲書 40 頁など。
- (27) 「致傅作義（一九三六年八月十四日）」中共中央文献研究室編、前掲書 43 頁。
- (28) 『朝日新聞（東京）』1935 年 8 月 9 日夕刊。
- (29) 『朝日新聞（東京）』1935 年 11 月 19 日夕刊。『毎日新聞（大阪）』1935 年 11 月 20 日朝刊。
- (30) 小林知治『北支に躍る人々』政道社 1935 年 19 頁。
- (31) 小林知治、前掲書、20 頁。
- (32) 秦郁彦『日中戦争史』河出書房新社 1961 年 111 頁。松井忠雄『内蒙古三国志』原書房 1966 年。
- (33) 盧明輝『徳王其人』遠方出版社 1998 年 70 頁。中見立夫「近代世界におけるモンゴル人」若松寛編『アジアの歴史と文化』同朋舎 1999 年 142 頁など。

- (34) 森久男「徳王と蒙古独立運動」森久男編『徳王の研究』創土社 2000 年 29 頁。
- (35) 盟、旗は清代以降モンゴル人地域において用いられてきた行政単位である。今日では、盟は省や自治区に次ぐ行政単位で市に相当する。旗は市や盟に次ぐ行政単位で県に相当する。
- (36) モンゴルの活仏ジェブツンタンバ・ホトクト 8 世が辛亥革命によって倒れた清朝皇帝（ハーン）に代わる新たなハーンに推挙され、「中国」とは異なる政権を樹立する。これがいわゆるボグド・ハーン政権である。詳しくは橘誠『ボグド・ハーン政権の研究—モンゴル建国史序説 1911 - 1921』風間書房 2011 年を参照。
- (37) ここまでの徳王の略歴は森久男、前掲書、14-16 頁を主に参照した。
- (38) 森久男、前掲書、16 頁。
- (39) ドムチョクドンロブ、前掲書、3 頁。
- (40) 盧明輝『蒙古「自治運動」始末』中華書局 1980 年 28-58 頁。
- (41) 黄奮生『内蒙盟旗自治運動紀実』中華書局 1935 年 218-220 頁。森久男、前掲書、78 頁。
- (42) 盧明輝『徳王其人』遠方出版社 1998 年 55-65 頁。
- (43) 森久男、前掲書、83 頁。
- (44) 善隣協会編『新生を歩む内蒙古』善隣協会 1934 年 16 頁。
- (45) ドムチョクドンロブ、前掲書、31 頁。
- (46) 丁曉杰「自治運動から関東軍との連携へ」『比較社会文化研究（18）』2005 年 9 月 4 頁。
- (47) 内田勇四郎『内蒙古における独立運動』朝日新聞西部本社編集センター 1984 年 71 頁。丁曉杰、前掲書、4 頁。
- (48) ドムチョクドンロブ、前掲書、62 頁。
- (49) 中嶋万蔵「満蒙回顧録」らくだ会編『高原千里』らくだ会本部 1973 年 55 頁。丁曉杰、前掲書、7 頁。
- (50) ドムチョクドンロブ、前掲書、71-71 頁。
- (51) 中嶋万蔵「徳王とともに④」『日本とモンゴル（6）9号』1971 年 12 月 56 頁。丁曉杰、前掲書、9 頁。
- (52) 関東軍参謀部「内蒙古工作の現状に就て（関特報（蒙）第 6 号）1936 年 4 月 28 日」島田俊彦・稲葉正夫編『現代史資料 8（日中戦争 1）』みすず書房 1964 年 554 頁。
- (53) 森久男『日本陸軍と内蒙工作』講談社 2009 年 165 頁。
- (54) ドムチョクドンロブ、前掲書、122 頁。
- (55) 内田勇四郎、前掲書、81 頁。
- (56) ドムチョクドンロブ、前掲書、157-158 頁。
- (57) ガンバガナ「綏遠事件と日本の対内モンゴル政策」『言語・地域文化研究（11）』2005 年 3 月 87 頁。
- (58) 「徳王勢力」内部における多様性についてはさらなる詳細な分析、検証が必要だと感じており、この点は今後の課題としたい。
- (59) 鄭之楚「内蒙古民族解放の歴史道路」『内蒙古社会科学（3期）』1980 年 6 月 41-42 頁。烏蘭夫革命史料編研室編『烏蘭夫回顧録』中共党史資料出版社 1989 年 160-189 頁。郝玉峰『烏蘭夫伝』1989 年内蒙古人民出版社 187-233 頁。李志新「百靈廟抗日暴動述評（3期）」1995 年 6 月 1-7 頁など。
- (60) Liu Xiaoyuan, *Reins of Liberation: An Entangled History of Mongolian Independence, Chinese Territoriality, and Great Power hegemony, 1911-1950*, California: Stanford University. 2006: pp248. 楊海英『中国とモンゴルのはざまで』岩波書店 2013 年 14 頁。

- (61) 善隣協会調査部編『蒙古と新疆』日本公論社 1935 年 61-63 頁。
- (62) 烏蘭夫革命史料編研室編、前掲書、171 頁。朝克「烏蘭夫早期軍隊建設思想及其実践」『中央民族大学学報(哲学社会科学版)(4期)』2007 年 7 月 12-13 頁。
- (63) 善隣協会調査部編、前掲者、62 頁。
- (64) 楊海英、前掲書、27 頁。
- (65) 徳王を民族主義者であるとする先行研究は、注 34 の他に以下のものがある。巴特尔「徳王と一九三〇年代の内モンゴル自治運動」『アジア文化研究(11)』2004 年 6 月 126-127 頁。丁曉杰、前掲書、13 頁など。
- (66) ウランフを民族主義者であるとする論考は、楊海英による一連の研究が代表的である。たとえば、楊海英「天南地北 ウランフ：書き終えて、好きになった男」『中国 21 (39)』2014 年 1 月 233-236 頁など。

(なお、本研究は 2015 年 2 月 15 日(日曜日)滋賀県立大学にて行なわれた科研合同ワークショップ「軍閥と近現代内モンゴル(科研・基盤研究[C]「現代中国の民族識別期における旗人の動向に関する研究」、科研・基盤研究[A]「アフロ・ユーラシア内陸乾燥地文明の歴史生態人類学的研究」)の際に発表した内容の一部を加筆修正したものである。)